地水火風

牧野恒一

バングラデシュの防火事情

JICAのプロジェクトの関係でバングラデシュを訪れ、現地で防火対策に関する改善指導を行って来た。2012年に死者百人を超える縫製工場の火災があり、2013年には別の縫製工場が崩壊して死者千人を超える大惨事を引き起こしたため、JICAが現地の縫製工場の構造・防火の改善指導プロジェクトに乗り出したものだ。

筆者はこの2つの事故について今年の2月に現地調査を行っているが、今回は、既存の縫製工場をモデルに改善プランを指導するということで、現場を詳しく観察でき、関係者の話も聞いたため、また違ったものも見えて来た。本稿では、安全や技術についてのバングラデシュの現状と、それを通して見えてくる日本の現状について記すこととする。

［バングラデシュ］

バングラデシュは、日本の三分の一程度の国土に1億5千万人以上の人が暮らし、かつては世界でも最貧国の一つに挙げられていた。

そのバングラデシュも、最近は外資の進出が進み、首都ダッカには高層ビルが建ち始めて、経済発展が進み始めた。バングラデシュの主要産業は繊維産業で、ダッカの市内や郊外には多数の縫製工場がある。人件費が安い割に労働力の質が良いためか、最近では日本の繊維会社の進出も始まっている。国民は極めて親日的で、英語がかなり通じ、巨大な人口は生産拠点としても今後のマーケットとしても魅力的、ということだろうか、日本政府も熱心に援助を始めている。

［縫製工場の火災］

2012年11月24日の夕方、ダッカ郊外アシュリア地区の縫製工場「タズリーン・ファッション社」で、死者1101名、負傷者76名を出す火災が発生した。工場は8階建てで、1階から出火し、階段を通って火煙が上階に拡大した。3つある階段は防火区画されていなかったため煙で汚染されて避難に使えず、窓も全て鉄格子がはまっていたためやはり避難に使えなかった。このため、工場内で作業中だった工員たちが多数、避難できずに死亡した。

ダッカ郊外の縫製工場では、この火災以外にも、2010年2月の「ゴリブ&ゴリブ」の火災（ガジプール地区、7階建て、死者21名、負傷者55名）、2010年12月の「ハミーム」の火災（アシュリア地区、11階建て、死者28名、負傷者180名以上）など、多数の死者が出る火災が発生している。

［縫製工場の倒壊事故］

2013年4月に発生したダッカ郊外サバール地区の縫製工場「ララ・プラザ」の崩壊事故はさらに悲惨で、死者1126人、負傷者2500人以上の大惨事となった。ララ・プラザビルは、8階建てで2階以上の階に5つの縫製工場が入る縫製雑居ビルとでもいうべきビルである。当初6階建てで建設され、8階に違法増築されていた。

崩壊前にビルの壁に亀裂が入っているのを従業員が見つけて避難を始めたが、仕事に戻るように命ぜられて戻ったところ崩壊が始まり、「わずか数分でパンケーキのように崩れ落ち、工場労働者の大半は逃げる暇もなかった（消防関係者の話）」という。

ダッカ市内のビルを見ても、構造耐力上問題ありそうなものが極めて多く、一目で施工不良とわかるビルも多い。このため、1年に一度くらいは建物倒壊事故が起きているが、事前に避難して死者が出ないことが多く、あまり大きな問題にはなって来なかった、ということだ。

［縫製工場の防火安全の実態］

構造の問題は専門外なのでさておき、防火安全の実態を見てみよう。

10階建てくらいの工場ビルの各階ごとに別の縫製工場が入っているララ・プラザビルのような「縫製雑居ビル」も少なくない。区画のないワンフロアに数百台のミシンが並び、女性が黙々と流れ作業で縫製作業をしている。当然ながら可燃物量は極めて多く、綿ぼこりがフロア中に立ちこめて、隅にうずたかくほこりの山ができている。そこを通る電気配線には220ボルトの電圧がかかっているが、素人が工事したような配線が多く、結合部がむき出しのものもある。

製品のストックヤードには、衣類が天井まで雑然と積み上げられており、見通しが利かない部分も多いが、自動火災報知設備は設置されないのが普通で、手動の火災警報設備に頼っている。

階段を防火区画するという発想はなく、火災が発生したら火煙の拡大経路となる一方、避難には使えない。窓には防犯のため鉄製の飾り格子をつけるのが普通であり、窓から避難したり救助活動を行ったりすることは想定されていない。

消火のための水バケツや水槽、火をたたき消すためのハエたたきのような消火具などが各階の要所に準備されており、消火器、消火栓も多数置かれている。また、自衛消防組織は整備されていて階ごとに顔写真付きで掲示されており、火災発生時の行動手順も図入りで貼り出されている。訓練は消防法上年4回以上行うこととなっており、毎月1回訓練している工場もある。この点、年2回以上の訓練を義務づけている日本よりもしっかりしているとも言える。

というわけで、工場全体の労働者の密度が極めて高いことを前提に、「火災が発生したらすぐわかるので、避難せず、みんなで消してしまおう」という戦略をとっていることがわかる。この戦略はそれなりに合理性があると思うが、発生した火災を100%消火できるわけではないので、「万一、消火に失敗した場合の火煙の拡大防止と避難路の確保」という点では大いに問題がある。可燃物量が極めて多いこと、要避難者数が極めて多いことなども、「避難」という局面を考えれば大きな問題である。

火災の発生は日常茶飯事のようだが、大部分はすぐ消火でき、死者の発生にまで至ることは多くはない。日本なら100人単位で死者が出そうな環境だが、多くて10人くらいの死者で済んでいるのが不思議と言えば不思議である。日本人よりサバイバル能力が遥かに高いのかも知れない。

［丁寧な仕事を大事に］

バングラデシュの縫製工場が以上のような実態であるのは、防火安全に関する知識の不足、防火法制の整備の遅れ、法令を遵守させるための制度や体制整備の遅れなどが大きな原因であるが、電気配線工事や防火区画貫通部の処理などの実態を見ると、工事が雑であることがリスクを引き上げている面も大きいと思う。

法制や行政体制の整備は、時間をかければ改善は進んでいくと思うが、工事が雑であるというのは、職人の腕や心意気、それを監督する現場監督の力量などと密接に関係するため、一朝一夕に改善できるものではなさそうである。

日本に帰ってビルの施工の状況を観察すると、普通のビルでも見えないところの仕上げがとても丁寧なのに改めて感心する。これは、法制や体制の整備とは別の、日本の特質ではなかろうか。昔から、腕の良い職人には社会全体で敬意を払い、職人たちも見えないところでも丁寧な仕事をしてそれに応える、という風土があって、それがモノとしての質の高さと安全をもたらしてきたのではなかろうか。

ただ、最近、そういう美風が消えて来ているようにも聞く。なくなってから「昔は日本も良かった」ということにならないよう、良い仕事をする現場の方々に敬意を忘れない社会を大事にしていきたいものだ。